

14章

テーマ:ヨナタンによるペリシテ人に対する勝利。サウルの軽率な命令が無視される。

ヨナタンによるペリシテ人に対する勝利

もう一度、ヨナタンは大きな勝利を収めます。でも、サウルが手柄を横取りし、嫉妬を示します。実際、サウルは自分自身の息子を殺すところだったのです！

14章には、ヨナタンがペリシテ人たちに対して用いた、戦いの作戦が書かれています。イギリスのアレンビー元帥(Edmund Henry Hynman Allenby, 1st Viscount Allenby(第一子爵アレンビー) : 1861年4月23日—1936年5月14日。イギリスの軍人で行政官。第一次世界大戦での活躍で知られている。ウィキペディアより)は、第一次世界大戦でトルコ軍襲撃に成功した前の晩、この章を読んだと言われています。これは面白い側面情報です。

私は、この地域の地理を良く知らないのですが、この戦いの作戦の詳細を説明することはできません。パレスチナに旅行したとき、その場所に行きたかったのですが、時間がありませんでした。それに、私は軍人ではないので説明ができません。アレンビー元帥がこの章を読んだときには、ヨナタンがどのように彼の軍事兵法を実行したかを見るのは、どきどきするような啓示だったと確信します。アレンビー元帥は、聖書に通じたクリスチャンでした。

見たところ、ヨナタンの作戦は、狭い道を通して彼の兵士たちを連れて行くことでした。ここでは、戦うための武器が少ししかなかったヨナタンの軍は、はっきりと優位に立っていました。東部ギリシャの山岳地帯テルモピュライの山道で、同じような戦いが行われました。ギリシャ人は圧倒的に少数だったにもかかわらず、ペルシャ軍を押さえることができました。イスラエルの場合、この作戦が確かに彼らに有利に働きました。なぜなら、イスラエルは絶望的に少数で、しかもほとんど武器を持っていなかったのですから。

この戦いの詳細とはばして、そのかわりにここにある偉大な霊的レッスンを見てみましょう。

(Iサムエル記14:18)「サウルはアヒヤに言った。『神の箱を持って来なさい。』神の箱は、その日、イスラエル人の間にあったからである。」

サウルは、契約の箱(または神の箱)を戦場に持ち出すべきではありませんでした。前にも見たように、サムエルの時代には、イスラエルの子らは契約の箱が戦いに勝たせてくれる、と考えてそれを迷信的に使っていました。明らかに、サウルが箱を持って来させたのも同じ理由です。

(Iサムエル記14:23)「こうしてその日、【主】はイスラエルを救い、戦いはベテ・アベンに移った。」

サムエルが契約の箱を持ち出したにもかかわらず、人間の側ではヨナタンの作戦が戦いに勝利を収めました。神さまはこの若者とともにおられます。彼が長生きしなかったのはとても残念です。神さまはその日、イスラエルをお救いになりました。

サウルの軽率な命令が無視される

(Iサムエル記14:24-27)「その日、イスラエル人はひどく苦しんだ。サウルが民に誓わせて、『夕方、私が敵に復讐するまで、食物を食べる者はのろわれる』と言い、民はだれも食物を味見もしなかったからである。この地はどこでも、森に入っていくと、地面に蜜があった。民が森に入ると、蜜がしたたっていたが、だれもそれを手につけて口に入れる者はなかった。民は誓いを恐れていたからである。ヨナタンは、父が民に誓わせていることを聞いていなかった。それで手にあった杖の先を伸ばして、それを蜜蜂の巣に浸し、それを手につけて口に入れた。すると彼の目が輝いた。」

戦いに勝つまでは誰も食物を食べてはいけないという、彼の父の妙な命令を、ヨナタンが知らなかったというのは、興味深いことです。実際、ヨナタンはすでに戦いに勝っていました。さて、私たちはサウルの本性を見始めています。ヨナタンが勝利を収め、サウルが手柄を横取りします。彼は息子の手柄を認めたくないのです。彼の「謙虚さ」は吹き飛んでしまい、嫉妬が表れています。

(Iサムエル記14:28-30)「そのとき、民のひとりが告げて言った。『あなたの父上は、民に強く誓わせて、きょう、食物を食べる者はのろわれる、とおっしゃいました。それで民は疲れているのです。』ヨナタンは言った。『父はこの国を悩ませている。ご覧。私の目はこんなに輝いている。この蜜を少し味見しただけで。もしも、きょう、民が見つけた、敵からの分捕り物を十分食べていたなら、今ごろは、もっと多くのペリシテ人を打ち殺していたであらうに。』」

サウルの命令は愚かでした。人々は疲れていました。彼らは戦って勝ったのです。何か食べるものが必要でした。サウルは言いました。

「夕方、私が敵に復讐するまで、食物を食べる者はのろわれる。」

彼の謙虚さは全くなくなってしまいました。

(Iサムエル記14:35)「サウルは【主】のために祭壇を築いた。これは彼が【主】のために築いた最初の祭壇であった。」

サウルは実際、主のために祭壇を築いてささげものまでささげています！

(Iサムエル記14:36-37)「サウルは言った。『夜、ペリシテ人を追って下り、明け方までに彼らをかすめ奪い、ひとりも残しておくまい。』すると民は言った。『あなたのお気に召すことを、何でもしてください。』しかし祭司は言った。『ここで、われわれは神の前に出ましょう。』それでサウルは神に伺った。『私はペリシテ人を追って下って行くべきでしょうか。あなたは彼らをイスラエルの手に渡してくださるのでしょうか。』しかしその日は何の答えもなかった。」

神さまはこの男サウルを全く用いてはおられません。

(Iサムエル記14:38-39)「そこでサウルは言った。『民のかしらたちはみな、ここに寄って来なさい。きょう、どうしてこのような罪が起こったかを確かめてみなさい。まことに、イスラエルを救う【主】は生きておられる。たとい、それが私の子ヨナタンであっても、彼は必ず死ななければならない。』しかし民のうちだれもこれに答える者はいなかった。」

ご覧のとおり、サウルは自分が悪いことを認めようとしません。誰か他の者が罪を犯したのだと言っています。軍隊は黙って立っていました。彼らは勝利はヨナタンのものだを知っていました。そして今、サウルは次のように言っています。

「神さまが私に答えてくださらなかったのは、誰かが私に従わず、誓いを破ったからだ。」

軍隊は、ヨナタンが蜜を味見したのを知っていました。そして彼らはサウルがこのとき、すごいはったりをでっち上げていたことも知っていました。サウルが王であるので、彼らは黙って立っていました。

(Iサムエル記14:40)「サウルはすべてのイスラエル人に言った。『あなたがたは、こちら側にいなさい。私と、私の子ヨナタンは、あちら側にいよう。』民はサウルに言った。『あなたのお気に召すようにしてください。』軍隊はあまり多くを語りません。

(Iサムエル記14:41)「そこでサウルはイスラエルの神、【主】に、『みこころをお示してください』と言った。すると、ヨナタンとサウルが取り分けられ、民ははずれた。」

サウルは、ヨナタンが悪いのだと信じていました。

(Iサムエル記14:42-43)「それでサウルは言った。『私か、私の子ヨナタンかを決めてください。』するとヨナタンが取り分けられた。サウルはヨナタンに言った。『何をしたのか、私に告げなさい。』そこでヨナタンは彼に告げて言った。『私は手にあった杖の先で、少しばかりの蜜を、確かに味見しましたが。ああ、私は死ななければなりません。』」

ヨナタンは有罪でした。サウルが彼にして欲しくないと思っていたことをしたかどでの有罪です。

「夕方、・・・まで、食物を食べる者はのろわれる」

とサウルは言ったのです。でも、これは死ぬほどのことなのでしょうか？

(Iサムエル記14:44-45)「サウルは言った、『神が幾重にも罰してくださるよう。ヨナタン。おまえは必ず死ななければならない。』すると民はサウルに言った、『このような大勝利をイスラエルにもたらしたヨナタンが死ななければならないのですか。絶対にそんなことはありません。【主】は生きておられます。あの方の髪の毛一本でも地に落ちてはなりません。神が共におられたので、あの方は、きょう、これをなさったのです。』こうして民はヨナタンを救ったので、ヨナタンは死ななかった。」

サウルは、自分の息子が自分の邪魔になったら、実際に彼を殺したことでしょ。なぜでしょうか？サウルはヨナタンに嫉妬していたからです。彼はすべての栄光を自分の物にしたいのです。軍隊は、サウルがわめき散らし、たけり狂っている間中ずっと沈黙していましたが、ヨナタンのいのちが危ないとなったとき、彼らはもう黙ってはいませんでした。

今、私たちはサウルの本性をえています。あとになって、彼がどのように神さまに直接的に不従順な行動をとるかを見ます。彼は、イスラエルに悲劇をもたらすようなことをします。もし神さまが介入されなかったなら、国自体が壊滅していたことでしょう。サウルは自分がまったく神の人でないことを明らかにしています。実際彼は、サタンの人です。次の章で、サウルがもう神さまに従わなくなっていることが分かります。彼は自分自身の計画に従っています。ついに、神さまの御霊はもう彼に語りかけることはありません。神さまがもう彼を導かれなくなり、彼は神さまから悪霊の世界に首を突っ込みます。そして私たちは、サウルが実際にエン・ドルの魔法使い(訳注:日本語では霊媒)に助言を求めるといってもいいでしょう。今日の悪霊崇拝やオカルトや悪魔礼拝や占星術の表れを見ている私たちにとって、この箇所には偉大なレッスンがあります。大ぜいのサウルがいたところにいるアメリカを、神さまが助けくださいますように！

15章

テーマ: アガグに関するサウルの反抗。サムエル、サウルを叱責する。

アガグに関するサウルの反抗

神さまの命令に対するサウルの反抗がこの章に明らかにされています。同時に、サウルが人々の前で自分の罪を覆い隠すために、サムエルの助けを欲しがるという彼のみせかけも見ます。サウルは今、王として拒否され、回復の見込みはありません。サムエルがサウルのために嘆くことの中に、サウルに対するサムエルの愛を見ます。

なぜアマレク人とアガグを皆殺しにするという極端な手術が必要だったのでしょうか？その答えはエステル記の中にあります。もう少しでユダヤ民族を根絶やしにすることに成功するところだったハマンはアマレク人でした。神さまは、この人々の本当の性質をご存知でした。その性質は、荒野でのイスラエルに対する、いわれのない、意地の悪い攻撃に明かです。(出エジプト記17:8-16参照)

(出エジプト記17:8-16)「さて、アマレクが来て、レフィディムでイスラエルと戦った。モーセはヨシュアに言った、『私たちのために幾人かを選び、出て行ってアマレクと戦いなさい。あす私は神の杖を手に持って、丘の頂に立ちます。』ヨシュアはモーセが言ったとおりにして、アマレクと戦った。モーセとアロンとフルは丘の頂に登った。モーセが手を上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を降ろしているときは、アマレクが優勢になった。しかし、モーセの手が重くなった。彼らは石を取り、それをモーセの足もとに置いたので、モーセはその上に腰掛けた。アロンとフルは、ひとりはこちら側、ひとりはこちら側から、モーセの手をささえた。それで彼の手は日が沈むまで、しっかりそのままであった。ヨシュアは、アマレクとその民を剣の刃で打ち破った。【主】はモーセに仰せられた。『このことを記録として、書き物に書きしるし、ヨシュアに読んで聞かせよ。わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去ってしまう。』モーセは祭壇を築き、それをアドナイ・ニシと呼び、『それは「主の御座の上の手」のことで、【主】は代々にわたってアマレクと戦われる』と言った。」

サウルの人生の学びを続けて行くと、彼は確かにサタンの人であることが分かります。彼がそのような者であると言っても、彼を不当に扱ったことにはならないと思います。個人的には私は、彼が救われてはい

なかったと思いますし、彼の中に何か偽善的なものがあったと思うのです。彼は神の人のふりをしていましたが、一度もそうであったことはありませんでした。同時に彼は、アガグに関する自分の反抗と不従順を覆い隠そうとしました。

(Iサムエル記15:1-3)「サムエルはサウルに言った。『【主】は私を遣わして、あなたに油をそそぎ、その民イスラエルの王とされた。今、【主】の言われることを聞きなさい。万軍の【主】はこう仰せられる。「わたしは、イスラエルがエジプトから上って来る途中、アマレクがイスラエルにしたことを罰する。今、行って、アマレクを打ち、そのすべてのものを聖絶せよ。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ。』」

もし、アマレクの歴史をご存じないなら、この指示はあまりにも極端であるように思えることでしょう。そのときにそこにいたモーセは、申命記25:17-19でそのときのことを若い世代に語って聞かせました。

(申命記25:17-19)「あなたがたがエジプトから出て、その道中で、アマレクがあなたにした事を忘れないこと。彼は、神を恐れることなく、道であなたを襲い、あなたが疲れて弱っているときに、あなたのうしろの落後者をみな、切り倒したのである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えて所有させようとしておられる地で、あなたの神、【主】が、周囲のすべての敵からあなたを解放して、休息を与えられるようになったときには、あなたはアマレクの記憶を天の下から消し去らなければならない。これを忘れてはならない。」

もしこの人々が生き延びることを許されたなら、彼らはおそらく想像できないほどもっと多くの問題を引き起こしたことでしょう。見たところ、サウルはこの人々の幾人かを残しておきました。エステル記に入ったときに、私たちはそのひとり、ハマンを知ることになります。彼はヘブル民族を壊滅させようとしていました。もし神さまが介入されなかったら、彼はそれに成功していたことでしょう。神さまの見地に立つとき、神さまの間髪を入れぬ行動を理解することができます。とても率直に言って、私たちは神さまではないし、神さまの決定をしなければならない立場にもいないのですから、私たちは神さまに判決をくだすことはできません。

(Iサムエル記15:4-6)「そこでサウルは民を呼び集めた。テライムで彼らを数えると、歩兵が二十万、ユダの兵士が一万であった。サウルはアマレクの町へ行って、谷で待ち伏せた。サウルはケニ人たちに言った。『さあ、あなたがたはアマレク人の中から離れて下って行きなさい。私があなたがたを彼らといっしょにするといけなから。あなたがたは、イスラエルの民がすべてエジプトから上って来るとき、彼らに親切にしてくれたのです。』そこでケニ人はアマレク人の中から離れた。」

ここでサウルは民を呼び集め、彼らを数えていることが分かります。そして彼はアマレクの町に行き、滅ぼされる前にアマレク人たちから離れるように、ケニ人に警告します。覚えていらっしゃるでしょうが、ケニ人はモーセのしゅうとの子孫でした。士師記1:16と4:11-17で彼らのことが言及されています。(士師記1:16、4:11-17参照)

(士師記1:16)「モーセの義兄弟であるケニ人の子孫は、ユダ族といっしょに、なつめやしの町からアラデの南にあるユダの荒野に上って行って、民とともに住んだ。」

(士師記14:11-17)「ケニ人ヘベルは、モーセの義兄弟ホバブの子孫のカインから離れて、ケデシュの近くのツァアナニムの樫の木の下で天幕を張っていた。一方シセラは、アビノアムの子バラクがタボル山に登った、と知らされたので、シセラは鉄の戦車九百両全部と、自分といっしょにいた民をみな、ハロシェテ・ハゴイムからキシオン川に呼び集めた。そこで、デボラはバラクに言った。『さあ、やりなさい。きょう、【主】があなたの手でシセラを渡される。主はあなたの前に行かされるではありませんか。』それで、バラクはタボル山から下り、一万人が彼について行った。【主】がシセラとそのすべての戦車と、すべての陣営の者をバラクの前に剣の刃でかき乱したので、シセラは戦車から飛び降り、徒歩で逃げた。バラクは戦車と陣営をハロシェテ・ハゴイムに追いつめた。こうして、シセラの陣営の者はみな剣の刃に倒れ、残された者はひとりもいなかった。しかし、シセラは徒歩でケニ人ヘベルの妻ヤエルの天幕に逃げて来た。ハツオルの王ヤビンとケニ人ヘベルの家とは親しかったからである。」

当時、ほかのどの異教の民も行うことのなかった情け深い行動でした。

(Iサムエル記15:7)「サウルは、ハビラから、エジプトの東にあるシュルのほうのアマレク人を打ち、」
さて、この時点まではサウルは従順でした。

(Iサムエル記15:8-9)「アマレク人の王アガグを生けどりにし、その民を残らず剣の刃で聖絶した。しかし、サウルと彼の民は、アガグと、それに、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを惜しみ、これらを聖絶するのを好まず、ただ、つまらない、値打ちのないものだけを聖絶した。」

彼は“全部破壊するなんて、なんともったいないことだろう！”と考えました。そこで彼はアマレク人の王、アガグを助けました。サウルには、この人々の中の一番身分の低い小作人を助ける権利がないのと全く同じように、この王を助ける権利もありませんでした。この民は、全く悪でしたから、ことに、すべてにまして王はこのときに殺されてさばかれなければならなかったのです。サウルはまた、家畜の最上のものを聖絶しないでおく権利もありませんでした。まるで分捕りものを捕るために、サウルがこの攻撃をしたかのように見えます。でも、神さまはそれを禁じられたのです。イスラエル人たちは、この特別な場合には、全能の神さまのさばきをアマレク人にもたらしすべきだったのです。

(Iサムエル記15:10-11)「そのとき、サムエルに次のような【主】のことばがあった。『わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ。』それでサムエルは怒り、夜通し【主】に向かって叫んだ。」

民がサウルを選んだだけでなく、サムエルも彼を選んだのでした。サムエルはサウルを愛していました。彼はサウルに王として成功して欲しいと願っていました。サムエルは、ダビデにも増してサウルに成功して欲しいと願っていたのではないかと私は思います。ところが今、神さまはサウルを拒否されました。そして神さまに従順なサムエルは、神さまの命令を実行しなければなりません。サウルは従順ではなかったので、さばきが来ようとしています。

サムエル、サウルを叱責する

(Iサムエル記15:12-13)「翌朝早く、サムエルがサウルに会いに行こうとしていたとき、サムエルに告げて言う者があった。『サウルはカルメルに行って、もう、自分のために記念碑を立てました。それから、引き返して、進んで、ギルガルに下りました。』サムエルがサウルのところに行くと、サウルは彼に言った。『【主】の祝福がありますように。私は【主】のことばを守りました。』」

サウルは自分が従順だったと言いますが、サムエルがこれに何と言い返すか見てください。

(Iサムエル記15:14-15)「しかしサムエルは言った。『では、私の耳に入るあの羊の声、私に聞こえる牛の声は、いったい何ですか。』サウルは答えた。『アマレク人のところから連れて来ました。民は羊と牛の最も良いものを惜しんだのです。あなたの神、【主】に、いけにえをささげるためです。そのほかの物は聖絶しました。』」

サウルに耳を傾けてください。自分のしたことをカモフラージュするために、彼は二枚舌と逃げ口上を使い始めます。彼には動物を生かしておくのに、とても敬虔な理由があったのです。最もよいものを主にささげるために欲しかったのだと言うのです！もちろんこれは、自分の不従順を経験ぶった口実で覆い隠そうとしているのです。

同じような種類の偽善は現代の文化の中にも見られます。アルコール業界が、人々が訪問して楽しめるようにと美しい庭園や風光明媚な場所に献金するという報告を聞いたとき、面白いと思いました。彼らはいつでも、アルコール業界が毎年どれだけの税金を払っているかを人々に知らせるのが好きです。そしてメディアは見たところ、喜んでそれを報告しているようです。もちろん、アルコール業界が払っているどの税金よりも、アルコール中毒患者が政府に負担をかけていることはだれでも知っています。有害なビジネスは、良いことをしてそれをカバーしようとする傾向があります。多くの神さまの民が、自分たちの不従順を何か敬

度なプロジェクトに変えようとしています。確かにには分かりませんが、私たちはみんな、そのようなことで有罪なのではないでしょうか。

私が神学校を卒業してミニストリーに入ったとき、私は古くてくたびれた古いシボレーのポンコツ車に乗っていました。若い牧師として、私はそれに満足していました。私は独り者でしたし、私の教会の会衆はそれを恥ずかしがっていましたが、私はそのポンコツを乗り回すのを楽しんでいました。事実、彼らはこれは何かの冗談だと感じていました。その後私は若いお嬢さんに出会い、主が私に新しい車をくださるよう祈り始めました。私は、信徒を訪問するのに、もっと能率的になれるように新しい車が必要です、と主にお話しました。正直言って、「もっと能率的な訪問」には全く影響がなかったのです。私はすてきな車でこのお嬢さんを感じさせたかったです！人間にとって、信者であろうと未信者であろうと、勝手な理由をつけて自分の行動を合理化するのはあまりにも簡単です。

お気づきになるでしょうが、サウルの不従順が表ざたになったとき、彼は何かおこったかを“民”のせいにしようしました。彼は「民は羊と牛の最も良いものを惜しんだのです」と言いました。でも、記録には、「サウルと彼の民は」と書かれています。彼は王であり、責任があるのです。

(Iサムエル記15:20-21)「サウルはサムエルに答えた。『私は【主】の御声に聞き従いました。【主】が私に授けられた使命の道を進めました。私はアマレク人の王アガグを連れて来て、アマレクを聖絶しました。しかし民は、ギルガルであなたの神、【主】に、いけにえをささげるために、聖絶すべき物の最上の物として、分捕り物の中から、羊と牛を取って来たのです。』」

サウルは、主の御声に聞き従った、と言います。彼が「”私の“神」とか「”私たちの“神」とか言わず、「”あなたの“神」と言っていることに注目してください。彼は動物を殺さなかったことの責任を取ろうとしますが、責任があるのは、彼なのです。